

パリ管弦楽団 ブラス・クインテット

1部

コラール「最愛なるイエスよ、我らここに集い」 BWV706…J.S.バッハ
フーガト短調 BWV578…J.S.バッハ
金管五重奏曲 第1番…ベロン
バヴァーヌ Op.50…フォーレ
トリプティック(「ゴリウオーグのケーキウォーク」「亜麻色の髪の乙女」
「小さな黒人」から)…ドビュッシー

2部

金管五重奏曲「ステンドグラス」…ドルリュ
金管五重奏曲「短編集」…コスマ
オペラ「カルメン」から…ビゼー

夏

2013 四季コンサート 30周年記念

2013年5月18日(土)18:15開場 18:45開演
会場:浜松市教育文化会館
主催:浜松音楽友の会

プロフィール

名門パリ管弦楽団の首席奏者のみで構成され、全世界の音楽愛好家から絶大な評判を得ている金管アンサンブル。卓越した技術を持つパリ管弦楽団の中で、クリアで色彩的な音色を誇る金管楽器セクションによる華麗な演奏でファンを魅了している。今回2回目の来日公演。

フレデリック・メラルディ(トランペット)

1988年、パリ国立高等音楽院卒。マルセル・ラフォルスに師事。イタリア・ボルチア市国際コンクールで優勝。1997年にパリ管弦楽団に入団。1999年にヴィクトワール・ドゥ・ラ・ムジーク賞を受賞。2004年には世界中の著名な演奏家たちを集めて日本で結成された「スーパー・ワールド・オーケストラ」のソロ・トランペット奏者に選ばれた。

ステファン・グルヴァ(トランペット)

1994年、パリ国立高等音楽院卒業。トゥールーズ・キャピトル国立管弦楽団にソロ・トランペット奏者として迎えらる。1998年よりパリ管弦楽団のソロ・トランペット奏者として活躍。並行して、パリ国立高等音楽院等で後進の指導に励むほか、室内楽の分野でも活動している。

ベノワ・ド・パールシヨニ(ホルン)

2001年リュエイエ=マルメゾン地方音楽院卒。パリ国立高等音楽院でアンドレ・カザレに師事。2005年に、満場一致でパリ管弦楽団に入団。2006年よりソロ・ホルン奏者を務める。

数多くの音楽祭にも参加し、ソロ活動では、パリ管弦楽団、ジュネーヴ室内管弦楽団、サヴォア地方管弦楽団等とサル・プレイエルで協演している。

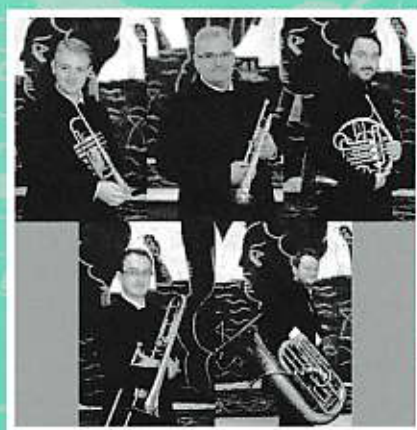
ギヨーム・コテ=デュムラン(トロンボーン)

10歳でユーフォニアムを始める。パリ国立高等音楽院にて、ユーフォニアムと室内楽でブルミエ・プリを獲得。1995年よりトロンボーンをジル・ミリエールに師事し、パリ国立高等音楽院を卒業。2001年よりパリ管弦楽団の首席ソロ・トロンボーン奏者を務める。2003年にフィンランドのリエクサ国際コンクール第3位を受賞。

ステファン・ラベリ(チューバ)

リヨン国立高等音楽・舞踊学校卒。シドニー国際チューバ・コンクール、マルクノイキルヘン国際器楽コンクール等で優勝。トゥールーズ・キャピトル国立管弦楽団やフランス国立ロワール管弦楽団らと協演し、1999年よりパリ管弦楽団の首席ソロ・チューバ奏者を務める。

パリ管弦楽団 ブラス・クインテット



QUINTETTE DE CUIVRE DE L'ORCHESTRE DE PARIS

●J.S.バッハ(1685~1750) / コラール「最愛なるイエスよ、我らここに集い」 BWV706

コラールとは、一般にドイツ・プロテスタント教会における賛美歌などを指す。バッハが遺したBWV(バッハ番号)525から771まで250曲にも及ぶオルガン作品中、BWV599~771までの173曲がオルガン・コラールであり、599から689まではバッハ自身によって編纂されて出版された。一方、BWV690から713まではバッハの没後、その弟子であったキルンベルガーによってまとめられたため、バッハの手によるものではない偽作も認められるが、この706はきわめて崇高で荘厳な音楽性を示している。バッハがケーテンの宮廷楽長を務めていた1717年頃から、晩年の1748年頃にかけて創作したと推定されている。

●J.S.バッハ / フーガ短調 BWV578

バッハはオルガンのために、独立したフーガを数曲残している。フーガとは、カノンと同じように、ある主題が複数の声部に繰り返し現れる形式であるが、幾つかの条件が必要となる。その殆どがヴァイマルの宮廷楽団時代かそれ以前に書かれたと見られており、コレリやレグレンツの主題を用いたものなどイタリア形式を研究した痕跡もある。美しい旋律線を持つこの作品は、「トッカータとフーガ 二短調」と並んでバッハのオルガン作品中もっとも親しまれており、ストコフスキーによる管弦楽編曲でもよく知られている。

●ジャン・ベロン(1795~1869) / 金管五重奏曲 第11番

ベロンはリヨンに生まれたフランスの作曲家、指揮者である。パリ音楽院でR.クロイツェルにヴァイオリンを、A.レイバに作曲を師事、その後パリを舞台にオーケストラのコンサートマスターや指揮活動が続けたが、作曲家としては「12の金管五重奏曲」と幾つかの室内楽作品を除くと、現在に知られた作品はほとんどない。本作は1848年から50年にかけて書かれ、1850年代に出版された。第11番は4楽章構成を採っており、第1楽章アレグロ・モデラート、第2楽章スケルツォ、第3楽章アンダンテ、第4楽章ロンド・ボラッカで、きわめてロマンティックな作品である。

●ガブリエル・フォーレ(1845~1924) / バヴァース Op.50

バヴァースとは、16世紀初頭に現れた宮廷舞曲。スペインが起源と言われ、クジャクが羽を広げて佇むような、威厳に満ちた風格でゆったりと踊られる。本作品は、まず1886年にジュール・ダンベ演奏会管弦楽団のために管弦楽曲として作曲され、翌年にパトロネスだったグレッフル伯爵夫人に勧められて合唱が付け加えられた。後に作曲者自身の劇付随音楽「マスクとベルガマスク(1919年)」の終曲としても使用されており、これに啓発されたドビュッシーが「ベルガマスク組曲」の中で「パスピエ(出版前はバヴァース)」を、ラヴェルが「亡き王女のためのパヴァース」を書いたことはよく知られている。清冽で優美、潤いを持った格別な叙情を湛えている。

●クロード・ドビュッシー(1862~1918) / トリプティク(「ゴリウォークのケーキウォーク」「亜麻色の髪の乙女」「小さな黒人」)

トリプティクとは、キリスト教美術で祭壇を飾るための3枚一組の聖画像であり、ここでは三幅対をなす連作を意味すると思われる。1899年、ドビュッシーはリリーと結婚したが、5年後にはエンマとの不倫が露見、リリーはピストル自殺を図る。翌年リリーと離婚、裕福な銀行家夫人エンマと同棲し、愛娘クロード=エマ、愛称シュシュが誕生した。6曲からなる「子供の頃分」はシュシュのために書かれ、その終曲が「ゴリウォーク(機械仕掛けの人形)のケーキウォーク」。またドビュッシーはショパンにならい、各々12曲の「前奏曲集」を2集残した。「亜麻色の髪の乙女」は、その第1集第8曲、作曲家が青年期に書いた歌曲からの転用であるが、きわめて甘美な情感に彩られている。「小さな黒人」は、黒人のダンスであるケーキウォークに合わせて陽気に踊る様子。

●ジョルジュ・ドルリュエ(1925~1992) / 金管五重奏曲「スタンドグラス」

ドルリュエはフランスの作曲家。パリ音楽院でD.ミヨーに師事、ローマ大賞を得て、B.ヴィアンとの合作で初のオペラ「雪の騎士」を作曲。その後映画音楽の世界に入り、F.トリュフォー監督作品「ピアニストを撃て」、「終電車」、「隣の女」など数多くの名作で音楽を担当。1979年の「リトル・ロマンス」ではフランス人初のアカデミー賞作曲賞を受賞した。同時にクラシカルな作品も多数残しており、「スタンドグラス」は1979年、金管五重奏のために書かれた。

●ウラジーミル・コスマ(1940~) / 金管五重奏曲「短編集」

コスマはルーマニアの作曲家、指揮者。パリ音楽院に留学してN.ブーランジェの薫陶を受け、クラシック、ジャズ、映画音楽等を学んだ。その後M.ルグラン楽団を経てY.ロベール監督の「ぐうたらパンザイ」で映画音楽を担当。その後「ディーバ」、「ラブ・ブーム」などで人気作曲家となり、またテレビなど現在まで200以上の作品を書いている。「短編集」は第1楽章アレグレット、第2楽章アンダンテ・ボーコルバート、第3楽章ウィーヴァ。

●ジョルジュ・ビゼー(1838~1875) / オペラ「カルメン」から

「カルメン」はフランス歌劇を代表する名作であり、メリメの小説をもとにした全4幕は、音楽や歌の間をセリフで繋ぐオペラ・コミック形式で書かれている。まず心が浮き立つような躍動感に溢れた「前奏曲」に続いて第1幕の「ハバナラ(恋は野の鳥)」。タバコ工場に勤める妖艶な女カルメンが、警備にあたっている真面目なドン・ホセに向かって誘惑するように歌い、赤い花を投げる。やがてホセの許婚者で同郷の娘ミカエラが現れ、故郷を偲んで2人で歌うのは美しい「ミカエラとホセの二重唱」。そして第4幕への前奏曲「アラゴネーズ」が現れて、最後はグラナダの人気闘牛士エスカミーリョの歌う勇壮な「闘牛士の歌」。